



論文 社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴う造形表現活動の展開 : ゴブリンプロジェクトのコミュニケーション関連要件による分析

著者	小中 大地
雑誌名	芸術学研究
巻	22
ページ	11-20
発行年	2017-12
URL	http://doi.org/10.15068/00151838

社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴う造形表現活動の展開

ゴブリンプロジェクトのコミュニケーション関連要件による分析

小中大地

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻

キーワード：造形ワークショップ／参加型アート／コミュニケーション／地域アートプロジェクト／ホスピタルアート

要旨

コミュニケーションを伴う造形表現活動（FAAC）における、コミュニケーションに関する要件を整理し、FAACにおける多様なコミュニケーションのかたちを示すことが、本稿の目的の1つである。そしてコミュニケーションに関する要件のタイプと継続性の関係を検証することがもう1つの目的である。近年、FAACは、地域アートプロジェクト等により社会の様々な現場に広がっている。一方でディスコミュニケーション等の問題も生じているが、過去の事例などからも、活動を継続していくことがそれらを解決できると考えられる。

筆者は10年以上の間、事物の擬生物化表現作品「ゴブリン」を制作するFAAC「ゴブリンプロジェクト」を実施してきた。そしてコミュニケーションに関する要件によって、活動の継続性が異なるという実感を得てきた。そこで本稿では、ゴブリンプロジェクトの活動実績から、コミュニケーションに関する要件の類型とタイプを示し、継続性との関係を検証した。

まずはコミュニケーションに関する要件の3類型 [1] 作品類型, [2] 参加型類型, [3] アーティストの滞在性類型, 計14タイプに分類して概要を述べることで、FAACにおける多様なコミュニケーションのかたちを示すことができた。次に過去のゴブリンプロジェクト約150件から継続性が比較できる75件を対象とし、上記要件の各タイプ別に活動の継続性を分析した。

その結果、身体接着型（作品類型）、純粋協働型（参加型類型）、複数日滞在型（滞在性類型）の継続性が高い傾向にあった。これらはいずれも強い協働性を伴う要件であると考えられた。

Developing Formative Art Activities with Communication at Diverse Society Sites:

Analysis of the Goblin Project by the Communication Requirements

KONAKA Daichi

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
Doctoral Program in Art and Design

Keywords: Formative Art Workshops / Participatory Art / Communication / Community Art Project / Hospital Art

Summary

The first purpose of this paper is to describe the various communication forms used in formative art activities with communication (FAAC) that have various communication requirements. The second purpose is to examine the relationship between the type of communication requirement and the continuity of the art activities. Lately, FAAC has spread to diverse society sites through regional art projects. There are problems such as miscommunication, but are the cases that the continuations of the activities could solve it.

For over 10 years, I have worked on the Goblin Project, which involves FAAC, to create biomimetic expressions of goblins from everyday objects. I observed that the continuity of activities differs based on the communication requirements. Then, in this paper, I described different types of communication requirements and examined the relation between communication requirement types and continuity of FAAC, by looking at the Goblin Project.

First, I classified the activities of the Goblin Project into three types: 1) artwork form, 2) collaboration form, and 3) artist visit. Then, I described the various forms of communication in FAAC. Next, I analyzed the continuity of 75 activities by types.

The results confirmed that body adhesion type (artwork form), cooperation type (collaboration form), and multi-day stay type (artist visit) were related with the continuity of FAAC. I argued that communication requirements related to these activities facilitate cooperativeness.

1 序論

1-1 背景

(1) コミュニケーションを伴う造形表現活動の普及

近年、造形表現活動は美術館やギャラリーのような従来から造形表現活動が展開されていた場所から、地域イベント、学校、商店街、複合商業施設、病院、介護施設、福祉施設などに広がっている。本稿は、こういった社会の多様な現場で展開される、コミュニケーションを伴う造形表現活動（以下、FAAC（Formative Art Activities with Communication）とする）を主題とする。

コミュニケーションを伴う造形表現について歴史的にみると、1970年代から積極視され始めた美術館等での教育普及活動に伴い、造形ワークショップ¹⁾等の形態で広まっていった。2000年代に入り、コミュニケーションを伴う造形表現の場が、本来芸術が存在しない場所に、より存在するようになった。例えば「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に代表される地域アートプロジェクト²⁾の場、都心の百貨店内でのイベント、病院や福祉施設などのケアの現場³⁾でも実施されている。

こうした社会背景の中で、筆者は2005年より、事物の擬生物化表現を用いた造形作品「ゴブリン」の制作を開始した（図1）。そして2009年頃より、アーティストとして社会の多様な現場に出向き、人々との関わりを通して制作していくコミュニケーションを伴った造形表現活動「ゴブリンプロジェクト（以下、ゴブリンP）」へと制作を発展させていった。この活動を通し、参加者の世代や活動実施地の性質が異なっても、FAACが社会の中で機能するという実体験を幾度も重ねてきた。



図1 「画びょうゴブリン」（「ガッコーゴブリン」より）、友部町立（当時）友部小学校／茨城県友部町（現・笠間市）、2005

(2) ゴブリンPとは

a 概要

ゴブリンとはもともと、「小鬼。化け物。人間にいたずらをする妖精。」という意味を持つ⁴⁾。そして筆者によるFAACの名称をゴブリンP、制作する作品をゴブリンと呼んでいる。

ゴブリンPで制作するゴブリンは、事物を元とし、生物的な形状をしている⁵⁾。基本的には「顔」が付き、体や手足の有無は活動によって異なる。つまり、こうした表現は「事物の擬生物化表現」であると言えるだろう⁶⁾。

元になる事物は、日用品から、山や岩などの自然物、人の背中など様々なものがある。またそれらの事物は活動を実施する現場に関係があるものを選ぶことが多い。作品のサイズは指先ほどの小さなもの（図2）から、山のように巨大なもの（図3）まであり、立体的な場合だけでなく平面的な場合もある。

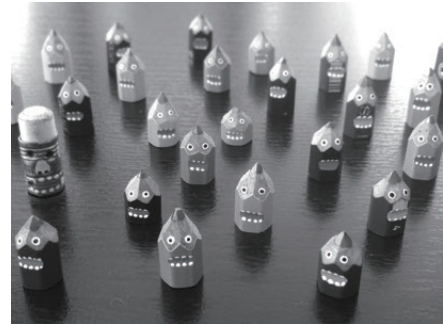


図2 「鉛筆ゴブリン」、2011

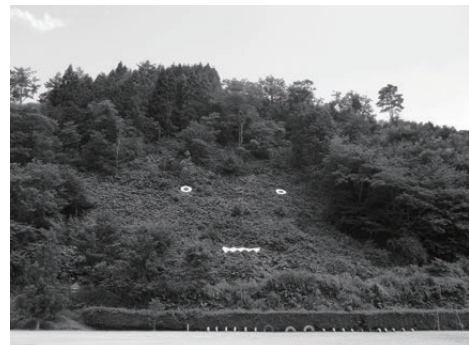


図3 「山ゴブリン」（「雲南ゴブリンプロジェクト～塩田ゴブリン2010～」より）、雲南市立塩田小学校（当時）／島根県雲南市、2010

b 実施現場と目的

これまで実施してきた主なゴブリンPの件数は約150件で、その実施現場は以下のように分類される。

- 1) 地域の現場（公民館、商店街、地域イベント等）
- 2) 複合商業施設（百貨店等）
- 3) 芸術施設（美術館等）
- 4) 学校施設（小学校、中学校等）
- 5) ケアの現場（病院、高齢者施設、福祉施設等）

これらの割合を図4に示した

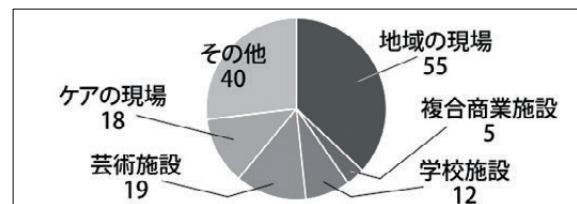


図4 ゴブリンP実施現場の割合（数値は件数、2017年3月31日時点）

次に、ゴブリンPの現場別の活動目的について述べる(図5)⁷⁾。まず、どの現場でもゴブリンPによって「造形表現活動」と「コミュニケーション」を体験することは共通している。参加者が活動を体験することで新たなものの見方などを習得することや、その過程でコミュニケーションをとることは、子どもの参加者だけではなく大人の参加者にとっても体験的な意義がある。それらに加え、その体験によって「〈快〉の感情」「日常の感覚への+α(発散, 達成感, 高揚感, やすらぎ等)」「にぎわい(現場別で目標量は異なる)」を目指すところまでは現場別でも概ね共通している。以上を「一次目的」とする。

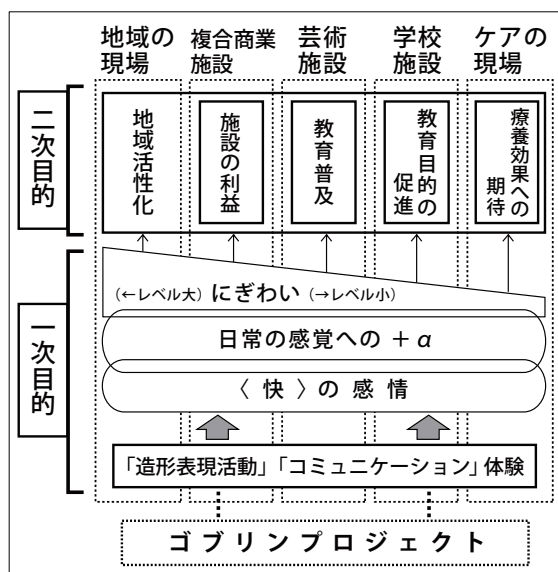


図5 ゴブリンPの現場別目的

そして、これら「一次目的」から派生する「二次目的」は、現場別で異なる。まず「地域の現場」では主に「地域活性化」を目的とする。そして他の現場では「地域活性化」に加えて別の目的を持つ。「複合商業施設」では集客につなげ、主に「施設の利益」につなげることを目的とし、「芸術施設」では主に「教育普及」を目的としている。また「学校施設」での活動の目的は主に各活動に設定された「教育目的の促進」にある。最後に「ケアの現場」では、特に「〈快〉の感情」や「日常の感覚への+α」を得ることで、全体的な「にぎわい」というよりは、患者自身の心理面への働きかけや、家族間や患者と職員間での良好なコミュニケーションを目的とする。そしてそれらを「療養」へとつなげていくことが期待されている(図6)。

また、「一次目的」は実施団体・施設とアーティストがともに持つ。「二次目的」は実施団体・施設の性質に備わっている。アーティストはそういった「二次目的」を含む実施団体・施設からの依頼に応えるため、意識した上で活動内容を考え、参加者に向けて振る舞う。



図6 「ゴブリン博士とクリスマスツリーのかざりゴブリンをつくろう!!」, 筑波大学附属病院/茨城県つくば市, 2013

(3) FAACの内容と研究対象について

a FAACの内容

FAACの内容を、「作品」「造形行為と協働性」「関係者」「段階」「コミュニケーション」から述べる。

・FAACによる作品

一人が作り上げる小型の作品から、大人数での協働作業によって作り上げる大型の作品まで、多様な形態となる。またその形態は、立体的であることも平面的であることもある。他にも、参加者の身体に接着して出来上がる作品や、展示中に参加できる作品もある(第2章の2-1と2-2より詳細を述べる)。

・FAACにおける造形行為と協働性

「造形行為」への参加とその「協働性」を、大きく分けて以下の3タイプで表すことができた(図7)。

- 1) 複数人で作る(強い協働性傾向)
- 2) 一人で作る(弱い協働性傾向)
- 3) 自分自身では作らない⁸⁾(弱い協働性傾向)

また上記1)と2)は造形行為に直接的に参加しているが、3)は造形行為に直接的に参加していない。だが、3)であってもアーティストにアイデアを提供するかたちであれば、間接的に参加すると言える。



図7 造形行為と協働性によるFAACの分類

・FAACにおける関係者

- 1) 実施団体職員…活動を発案する団体職員。団体職員自らでFAACを企画し実施する場合と、アーティストに依頼して実施する場合がある。またアーティスト自らが活動を発案し主体となる場合もある。
- 2) アーティスト…芸術・造形表現活動を主たる活動・仕事とする者。活動内容の「発案者」、活動進行役の「ファシリテーター」、制作へのアドバイスを送る「指導者」、協働制作などによる「制作者」の役割などを兼ねる。

- 3) 一般参加者…FAAC 本番段階に参加する一般の大人や子ども。
- 4) サポートスタッフ…現地での補助的スタッフで、現地の住民がボランティアで行う場合も多い。また、アーティストによる事前準備時の補助的スタッフも含まれる。
- 5) 一般鑑賞者…成果作品の展示段階で、作品を鑑賞する一般の大人や子ども。

・FAACの進行過程における段階

FAACがどのように進行していくか、以下の段階に分けることができる⁹⁾。

- 1) 依頼段階…実施団体職員がアーティストに依頼をする段階。
- 2) 企画・準備段階…実施団体職員とアーティストによって行われる¹⁰⁾。アーティストの現地入り前段階(目的の共有, 作品の構想, 必要物品の購入, 準備制作等)と、現段階(現地での準備制作, 現地ミーティング等)から成る。
- 3) 本番段階…一般参加者が参加する段階。実施団体職員(サポートスタッフ)とアーティストは、参加者のサポートや参加者との協働制作などに取り組む。
- 4) 展示段階…一般鑑賞者が、展示された成果作品を鑑賞する。また展示中に参加が可能な作品であれば、一般参加者が参加する。展示は実施団体職員やサポートスタッフが管理する。

また、FAACに関して一般化している言葉「造形ワークショップ」と「参加型アート¹¹⁾」については、一般参加者が参加する上記段階は、「造形ワークショップ」では主に3)の段階、「参加型アート」では主に2)～4)の段階であると言える。また「アートプロジェクト」は、1)～4)全ての段階を合わせたものであると考えられる。

・FAACにおけるコミュニケーションについて

依頼段階から展示段階において「会話」「協働作業」「ふれあい」等、様々なコミュニケーションが生じる。例えば本番段階での一般参加者とアーティスト、一般参加者同士、実施団体職員とアーティストなど、上記のどの段階においても全関係者の間にコミュニケーションが生じる。また本番段階や展示段階での一般参加者による「見守り」「見学」「鑑賞」などもFAACにおけるコミュニケーションに含まれると考えられる。

b 研究対象としたゴブリンPについて

ゴブリンPの概要(第1章1-1(2))とFAACの内容(第1章1-1(3)a)について述べたが、ゴブリンPは社会の多様な現場で、異なる条件のもと約150件実施されてきた。その中には多様な実施形態があると考えられる。よって、FAACにおけるコミュニケーションの

たちや要件ごとの継続性を明らかにするには、ゴブリンPは適した研究対象であると考えられる。

(4) FAAC普及に伴う諸問題と解決方法

a 諸問題解決につながる継続性

地域アートプロジェクトが社会で実施される際に、住民とのディスコミュニケーションが生じることがあるようだ¹²⁾。2000年に始まった「越後妻有アートトリエンナーレ」について、北川は著書により、「みな怪訝そうな顔だし、意見といえば「美術でまちづくりができるわけない。いい例があれば見せてくれ」という住民の反応や、「文化団体はハナから拒否反応で、デマには悩まされた。」という状況などにより「当初一九九九年に予定していた芸術祭は延期された。」と述べている¹³⁾。また例えば医療の現場では、アーティストへの十分な報酬を確保することが難しいという問題もある¹⁴⁾。また、FAACが活動を必要とする社会の現場に充分に行き届いている状況であるとは言えない。

ただ、社会の多様な現場でのFAACにおけるディスコミュニケーション等の諸問題を解決するための一要件として活動の「継続性」を挙げられると考える(図8右の範囲)。さきほど述べた地域アートプロジェクトの活動初期に住民の中で起こった、プロジェクトに対する疑念や排他的感情は、第一回の開催から変化し、第二、第三回と「継続」していく中で、受け入れられ次第に住民からも支えられるものに変化していったという経過が、北川により述べられている¹⁵⁾。また岩田は病院におけるアート活動運営の実践から、活動の継続的な試みにより関係者(職員、担当者、作り手)の関係性が発展する構造を述べている¹⁶⁾。他にも、継続していくことでFAACの意義や必要性がより一層社会的に認められていけば、アーティストへの報酬確保の問題も解決できるのではないだろうか。

b コミュニケーションに関する要件について

ゴブリンPを進めていく中で、同一の実施団体や同一の協働運営者から継続的に活動を求められることが多い。そういった活動の継続性には、コミュニケーションのかたちが関わっているという実感があつた。

そこで、コミュニケーションに関する要件の類型として、以下の3類型を挙げた。

- [1] 作品類型…「作品の形態や成立過程」の類型
- [2] 参加型類型…「参加者による作品への参加や関わり方」の類型
- [3] アーティストの滞在性類型…「実施現場へのアーティストの滞在性」の類型

そして、それぞれの類型をさらに細かく分類したタイプを示し、そのタイプごとのゴブリンP活動の継続性

を測ることで、継続につながり、そして問題解決につながる要件を検証することができる（図8）。

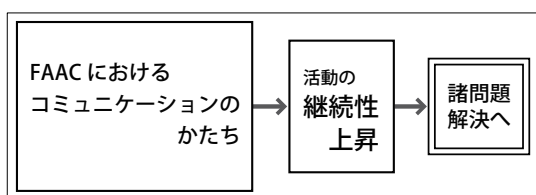


図8 「FAACにおけるコミュニケーションのかたち」による諸問題解決イメージ

1-2 本稿の目的と意義

(1) 本稿の目的

コミュニケーションに関する要件の類型と類型内のタイプを整理し、FAACにおける多様なコミュニケーションのかたちを示すことが本稿の目的の1つである。そして、コミュニケーションに関する要件と継続性の関係を検証することがもう1つの本稿の目的である。

(2) 本稿の意義

本稿により、コミュニケーションに関する要件という視点から、これまで学術的な研究が充分には行われてこなかったFAACの一構造を示すことができると考える。FAACに関連する先行研究^{17) 18)}はいくつかあるが、研究対象の対象現場種、対象活動数や対象年齢が限定的である。しかし本稿によって、FAACを社会の多様な現場で幅広い年齢層の参加者に対して、より質の高い活動として展開していくための方法の提示につなげていけるだろう。そしてその研究過程を通してFAAC全体の質を高めていくこと、FAACの価値や意義を確立することが将来的な目標である。

1-3 方法

(1) コミュニケーションに関する要件の分類と活動の継続性による分析

過去のゴブリンP活動を分析し、コミュニケーションに関する要件の3類型（[1] 作品類型、[2] 参加者類型、[3] アーティストの滞在性類型）と類型内のタイプ（計14タイプ）を整理した（第2章）。そして、そのタイプのゴブリンP活動の継続性を測り、タイプごとに図示した（図17）（第3章）。

(2) 研究対象

第2章の類型とタイプの整理にあたっては、過去ゴブリンP活動150件を分析対象とした。ただし第3章は継続性を比較するために、継続可能性の無い「学会・大学講義系の活動」「海外での活動」「形式上継続が見込めない活動」を対象から除外した。また活動の翌年以降の継続の依頼が多いことから「2016年度の活動」

も対象から除外した。よって75件の活動が研究対象とした。

2 コミュニケーションに関する要件の分類

本章では、FAACの中で生じる多様なコミュニケーションのかたちを示すために、前述したコミュニケーションに関する要件の3類型の概要を述べる。

2-1 コミュニケーションに関する「作品類型」の分類

コミュニケーションに関する「作品類型」として、以下の5タイプに分類した（表1）。

表1 作品類型の分類

タイプ	解説
1) 独立完結型	独立した単体で完結する作品形態
2) 独立集合型	最初は独立、次に集合する作品形態
3) 身体接着型	身体に接着して成立する作品形態
4) 壁面描画型	壁面に描画されて成立する作品形態
5) 大型単体型	不動産等による大型・単体の作品形態

1) 独立完結型

「独立完結型」とは、制作する作品が独立したものである場合で、多くの場合完成作品は制作者が持ち帰ることになる（図9）¹⁹⁾。作品形態は立体作品の場合と平面作品の場合がある。また、家族同伴で子どもが参加する場合には保護者が制作を手伝うという姿がよく見られる。保護者は直接作品に触れてサポートする場合もあるが、作品に触れることなく言葉でアイデアや方法を伝えるという姿も見られる。



図9 「大理石ゴブリン」（「ゴブリン・ラボ in 未来心の丘」より）、耕三寺博物館、広島県尾道市瀬戸田町、2013（手のひらサイズの大理石に参加者が顔を描いた）

2) 独立集合型

「独立集合型」とは、「独立完結型」の作品を集合させて完成させるというものである。集合させた後は、集合したままのかたちで残す場合（図10）と、一体一体の作品を外して再度「独立完成型」に戻す場合がある。一体一体の作品を作る過程では「独立完成型」と同様に家族間等での協働作業が起り得る。また、それ

らの作品を集合させて表す際には、参加者間で協働制作意識を持つことができる。



図 10 「ダンボールと葉っぱのゴブリンをつくろう!」, のぞみ整形外科クリニック/広島県東広島市, 2015
(参加者が制作した複数の葉作品を集合させた)

3) 身体接着型

「身体接着型」では、体に顔パーツ(目、鼻、口等)を貼り付け背中や腹部に顔をつける(図 11)。例えば背中に貼り付けることは一人で行うことは困難であるため、この制作はしばしば自然に協働制作のかたちとなる。さらにこのタイプでは事前に顔パーツを大量に作る作業が必要になるので、本番段階前からアーティストと関係者(参加者)との協働制作が始まるのがほとんどである。



図 11 「ゴブリンズ・エブリウェア!」, ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院/ノーリッチ・イギリス, 2014

4) 壁面描画型

「壁面描画型」は、テープや塗料を使用して壁面に描く(図 12)というタイプである。このタイプにおける制作の場合は始めから協働でテーマを持って複数人で制作していくことが多い。その他に、参加者は直接描かず、一般公開された状況で描くアーティストや制作スタッフを見学したり、自由に声かけをしたり、ときにアーティストにアイデアを与えるというかたちも含まれる。

5) 大型単体型

「大型単体型」は実物の山全体から制作した「山ゴブリン」(図 3)や岐阜県白川村で実物の合掌造りから制作した「合掌ゴブリン」(図 13)のように、アーティスト一人だけではつくれない巨大な作品を指す。「壁面描画型」との違いは、複数の造形が合体して成立す



図 12 「マスキングテープペインティング」, つくば市役所筑波交流センター/茨城県つくば市, 2012

るものではなく、基本的には単体で成立するという点である。また事物に直接顔パーツを接着して作る場合が多い。接着する際には接着を実施する役割や遠方から接着位置を指示する役割などがあり、複数人による協働作業が必要である。また材料が大きくなれば材料制作の段階でも協働作業が生じる。加えて接着作業中には一般公開型の制作のようになることもあり、その場合には直接制作に関係していない人々も見学者として場に参加するという様子が見られる。



図 13 「世界遺産アートプロジェクト 合掌ゴブリンをつくろう!」, 白川村合掌造り集落/岐阜県大野郡白川村, 2015

2-2 コミュニケーションに関する「参加型類型」の分類

コミュニケーションに関する「参加型類型」を 6 タイプに分類した(表 2)。まず参加者が造形表現を行う際の協働制作の度合いに着目した A 類型, そしてアーティストのみが造形行為を行い参加者は直接的な造形行為を行わない B 類型である。

表 2 参加型類型の分類

タイプ		解説
A	A-1) 個人完結型	個人で単体作品を制作し完結する形態
	A-2) 集合協働型	個人作品を集合させる協働型の形態
	A-3) 純粹協働型	始めから複数人の協働で制作する形態
B	B-1) アイデア型	制作者へアイデアを提供する参加形態
	B-2) 会話見学型	制作者への会話や見学による参加形態
	B-3) 展示参加型	展示作品に対して参加する形態

(1) A 類型

まず造形表現の協働制作の度合いに着目した A 類型について述べる。

A-1) 個人完結型

参加者個人が作り上げるという前提から始まる参加型を「個人完結型」とする。ただし「個人完結型」と同様に子どもが参加している場合などに保護者がサポートに入って協働制作となる場合もある。この参加型に対応する作品類型は「独立完結型」となる。

A-2) 集合協働型

独立した作品を集合させて完成させるという作品類型「独立集合型」の作品を制作する場合の参加型を「集合協働型」とする。ただし「壁面描画型」作品を作る活動の多くも、個人の表現が集合して壁画が出来上がるという観点より、物理的な結合のプロセスは踏まれないが「集合協働型」に含むことにする。作品類型は「独立集合型」と、「壁面描画型」の多くがこの参加型に対応する。

A-3) 純粋協働型

「純粋協働型」は、始めから複数人での協働制作により 1 つの作品をつくっていく場合の参加形態である(図 14)²⁰⁾。そして、この参加型から生まれる作品は、作品類型の「身体接着型」と「大型単体型」に対応する。



図 14 「石見銀山ゴ布林」、島根県大田市大森町、2015
(建物の側面に参加者が協働で目と鼻と歯を接着した)

(2) B 類型

次に参加者が直接的な造形行為を行わない B 類型について述べたい。

B-1) アイデア型

参加者がアーティストや制作スタッフに対して制作のヒントとなるアイデアを言葉などから提供する参加型を「アイデア型」とする。造形行為に直接的ではなく間接的に携わると言える。また、「アイデア型」に対応する作品類型は「独立完結型」「壁面描画型」「大型単体型」となる。

B-2) 会話見学型

制作中のアーティストや制作スタッフに向けて、見学する中で声をかけたり視線を送ったりするような参加型を「会話見学型」とする(図 15)。このタイプは

直接的には制作行為に携わらない。ただし例外として、参加者の存在がアーティストの緊張感やモチベーションに影響を与えることで作品の造形が変化することもあるので、厳密には参加者の無自覚的には、間接的に制作行為に携わることもある。また、この参加型に対応する作品類型は、作品サイズが大きく見学向きの「大型単体型」「壁面描画型」となる²¹⁾。



図 15 「ねがいごとの森ゴ布林」、筑波メディカルセンター病院／茨城県つくば市、2015

B-3) 展示参加型

展示中の作品に対して参加するのが「展示参加型」である。これまで述べたタイプは制作が進行する過程において参加するものであったが、このタイプは制作自体は完了(またはほぼ完了)しており、その作品を鑑賞する際に参加体験できるという参加形態である。

例えば、2005年に制作した最初のゴ布林作品である「ガッコーゴ布林(図 1)」では、小学校の一教室内に 97 体の指先サイズの作品を散りばめて展示したところ、参加者には探すことも含めて鑑賞を楽しんでいる様子が見られた。こうした「探す」かたちもあれば、2016年に展示した「はじまりゴ布林」では、参加者は歯のパーツを持って写真撮影を行うことで、作品自体に参加した(図 16)。また「展示参加型」に関しては、いずれの作品類型でも成立する。



図 16 「はじまりゴ布林」、はじまりの美術館／福島県耶麻郡猪苗代町、2016

2-3 コミュニケーションに関する「アーティストの滞在性類型」の分類

アーティストがゴ布林 P を行う際の現地への「滞

表3 アーティストの滞在性類型の分類

タイプ	解説
1) 複数日滞在型	アーティストが宿泊して複数日滞在する形態
2) 複数日通い型	アーティストが通いで複数日実施する形態
3) 単日型	アーティストが本番1日のみ滞在する形態

滞在性」は、1日だけの滞在か、複数日の滞在かという点と、滞在中その地に宿泊するかどうかという点から、以下の3タイプに分けることができる(表3)。

1) 複数日滞在型

アーティスト居住地から遠い実施現場での活動で、アーティストが現地に宿泊して複数日滞在する場合は「複数日滞在型」とする。この場合、宿泊による制作時間が増加すること、それにより規模の大きな作品が作れることにより協働作業が増える傾向がある²²⁾。

2) 複数日通い型

アーティスト居住地の近隣が実施場所である活動を複数日行うときなどに、アーティストは現地で宿泊せずに自宅から通う場合を「複数日通い型」とする。この場合、制作時間は「複数日滞在型」よりやや減少するものの複数日の制作によりその間の作業分担も含めて協働作業が生じる傾向がある。

3) 単日型

現場打ち合わせや下見を除き、活動本番が一日のみである場合を「単日型」とする。この場合は準備制作をアーティストが独自で行い、現地スタッフとの協働作業は実質当日の直前準備のみということが多い傾向にある。よって協働レベルは、「複数日滞在型」と「複数日通い型」よりも明確に低下する。

3 コミュニケーションに関する要件の継続性による分析

3-1 目的と方法

FAACにおけるコミュニケーションに関する要件の継続性を明らかにするために、過去のゴブリンPの活動実績より分析した。第1章の1-3(2)に従い分析対象を過去ゴブリンP活動75件とした。そして、その75件の活動を、コミュニケーションに関する要件の各タイプ(第2章2-1~2-3)から分類し、継続性(継続・非継続)を測定した。また、その継続性についてだが、同一の団体から再度活動の依頼があった場合には「継続した」とした。そして同一の協働運営者からの依頼で団体や現場を変えて継続した場合に関しても「継続した」とした²³⁾。

3-2 結果と考察

研究方法に基づき分析対象の75件の活動を、コミュ

ニケーションに関する要件の各タイプから分類し、その分類ごとに活動が継続したかどうかについて、件数と割合を図示した(図17)。ただし活動によっては1件の活動の中で複数の主題を実施するため、複数の「作品類型」「参加型類型」がある。よってこの2類型については、それぞれで件数の合計数が75件を上回る。

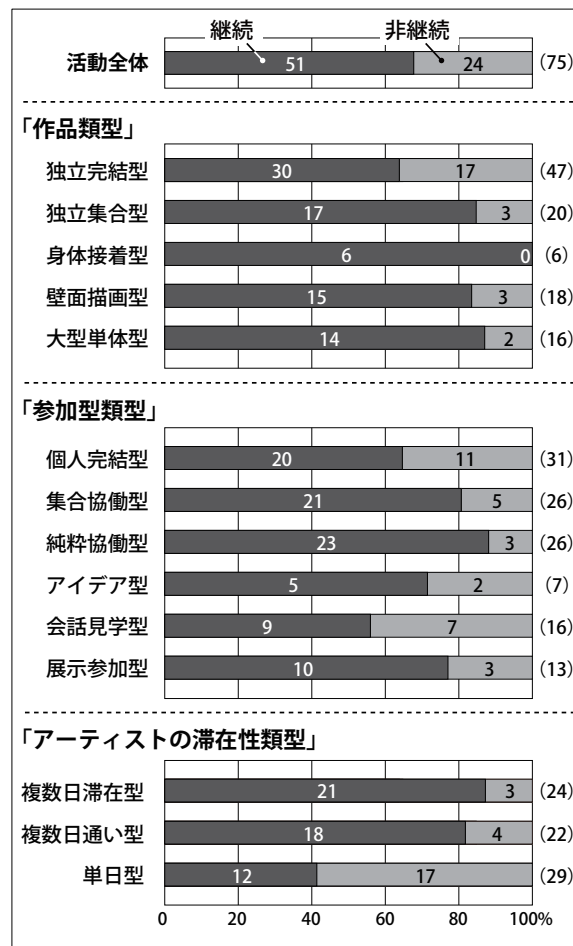


図17 タイプ別の継続性割合(数値は件数、括弧内は各合計)

(1) 「作品類型」の継続性による分析

「作品類型」の各タイプによる活動の継続性(図17上段)に着目すると、「独立完結型」のみ、活動全体の継続性より低かった。一方それ以外の4タイプは活動全体の継続性より高かった。その中でも該当活動数が6件と少ないものの「身体接着型」は全て「継続」であった。

活動全体より高い継続性となった上位4タイプは、どれも2人以上の関わりにより成立する作品類型であった。また「身体接着型」の活動は、参加者同士が顔パーツ接着行為を通して関わり合うという形式なので、和やかな「ふれあい」を伴った、会話等とは質の異なるコミュニケーションが生じると言える。この点が高い継続性につながったのではないかと考えられる。

(2) 「参加型類型」の継続性による分析

「参加型類型」の各タイプによる活動の継続性に着目すると(図17中段), 4タイプが活動全体よりも高い継続性, 2タイプが活動全体よりも低い継続性となった。特に「純粹協働型」と「集合協働型」は80%以上の高い継続性を示した。

まず継続性が上位の2タイプは, 複人数それぞれが造形行為に直接参加するという参加型である。次に最も低い継続性であった「会話見学型」では, 参加者は造形行為には直接的には参加せず, 「アイデア型」のように間接的に参加するわけでもない。そして次に低い継続性であった「個人完結型」は, 基本的には一人で行う造形行為によって成立する。最後に継続性が中位の2タイプについてだが, 「アイデア型」では参加者は間接的に関わりながらアーティストと協働で制作する。また「展示参加型」だと, 参加者は造形行為自体に参加しないかたちから, 複人数で造形行為にも参加するかたちまで幅がある。

以上より, 参加者が「造形行為」自体に直接的でも間接的でも,

[1] 複人数で関わる場合(「集合協働型」「純粹協働型」「アイデア型」)

[2] 一人で関わる場合(「個人完結型」)

[3] 関わっていない場合(「会話見学型」)

によって活動の継続性が変わる傾向(継続性: [1] > [2] > [3])が見られた。これより, 参加者は造形行為自体に, 直接的にでも間接的にでも意識的に関わった方が継続性が高まり, 複人数で関わればさらに継続性が高まることが示された。

ただし「展示参加型」に関しては, 主題によって[1]~[3]が異なってくる。しなしながら, 75%以上という高い継続性を示した背景には, レクリエーション性の高さや身体の運動性が含まれることが関係していると考えている。このことは, 「作品類型」の結果で上位だった「身体接着型」と「大型単体型」は, どちらも身体の運動性を伴う活動であることにも関係していると思われ。

また「集合協働型」「純粹協働型」「アイデア型」の比較より, 直接的に「造形行為」に参加した方(「集合協働型」「純粹協働型」)が, 間接的に参加する(「アイデア型」)よりも継続性が上がることが示された。

(3) 「アーティストの滞在性類型」の継続性による分析

ゴブリンPを実施する際の「アーティストの滞在性類型」の各タイプに着目すると(図17下段), 「複数日滞在型」と「複数日通い型」の2タイプの継続の割合が全体の値よりも上昇した。また2タイプ間では「複

数日滞在型」の方がやや継続性が高かった。一方「単日型」は全体の値よりも大きく継続の割合が低くなり50%を下回った。

「複数日滞在型」と「複数日通い型」は, ともに複数日に渡る活動期間の中で, アーティストと運営者や参加者との協働制作が生じる傾向がある。またその傾向は, アーティストが1日に活動できる時間を長く確保できることより, 「複数日滞在型」の方が高い。これより, アーティストの滞在性によって活動の協働性が強まるほど, その継続性も高まるという傾向が示された。

3-3 継続性による分析のまとめ

3類型「作品類型」「参加型類型」「アーティストの滞在性類型」それぞれで, もっとも高い継続性を示した「身体接着型」「純粹協働型」「複数日滞在型」は, 要件14タイプ全体の中でも上位から3タイプという継続性の高さであった。そしてこれらは, いずれも協働性を伴う要件である。つまり, 協働性を持つ要件を主題に取り入れることで, 高い継続性が期待されることが確認できた。また「身体接着型」作品が100%の継続性を示したことから, 和やかな「ふれあい」を伴ったコミュニケーションの継続性への可能性が考えられた。

また「参加型類型」の分析より, 参加者は直接的, 間接的を問わず, 造形行為に意識的に関わった方が継続性が高まり, 複人数で関わればさらに継続性が高まることが示された。また「展示参加型」が比較的高い継続性を示した背景に, レクリエーション性の高さや身体の運動性という要件があることが考えられる。高い継続性を示した「身体接着型」と「大型単体型」にも身体の運動性は含まれるため, この要件の持つ継続性への可能性が予想される。

活動が協働性を持てば高い継続性が期待されるという結果について, 過去のゴブリンP活動中に該当するエピソードがある。2012年, 島根県雲南市に「二代目山ゴブリン」という作品の制作プロセスへのある参加者が, 一年以上に渡る展示期間中に造形が崩れかけた際, 率先して修復作業にあたっていたそうだ。その参加者の制作時に「力を合わせた」という体験が, この行動につながったと考えられる。この雲南市での活動は2017年現在までで5度実施させており, 特に継続性の高いものとなっている。

4 結論

本稿では, 過去ゴブリンP活動の分析により, FAACにおけるコミュニケーションに関する要件を14タイプに整理して概要を述べた。これにより, FAACにおいて生じる多様なコミュニケーションのかたちを示すこ

とができた。このことはFAACの一構造の解明にもなったと言えるだろう。

また、コミュニケーションに関する要件の14タイプごとに活動の継続性を分析したところ、特に「身体接着型」「純粹協働型」「複数日滞在型」の3タイプが高い継続性を持つという結果となった。これら3タイプはいずれも強い協働性を伴う要件である。つまり協働性を持つ活動には、高い継続性が期待できるということが示唆された。また「身体接着型」の特に高い継続性より、軽度の「ふれあい」を伴ったコミュニケーションの継続性への可能性が示された。他にも、「参加者が造形行為に直接的にでも間接的にでも意識的に関わる」ことや「身体の運動性」が継続性を高めることが示唆された。以上の結果は、本稿において主にゴブリンPの分析により得たものであるが、ゴブリンP以外の様々なFAACへの汎用性を待つものであると考える。

ただ、本稿における要件の継続性による分析は、あくまで両者の相関関係を分析したもので、因果関係の検証には至っていない。この課題にも留意し、今後は本稿の結果を検証するために、過去ゴブリンP活動の協働運営者へのアンケート調査やインタビュー調査により別視点からも研究を進めていく予定である。

(謝辞)

本稿の分析対象としたゴブリンPは、どの活動も実施関係者に支えられた上で実現してきたものである。各現場の関係団体の皆さま、活動への一般参加者の皆さま、サポートしてくれた大学の後輩の皆さま、関係者各位に心より感謝申し上げます。

註

- 1) 「造形ワークショップ」について、事例、企画方法、成り立ちなどから述べられている。高橋陽一、杉山貴洋、川本雅子、田中千賀子(著)、高橋陽一(編):造形ワークショップ入門、武蔵野美術大学出版局、2015
- 2) 「アートプロジェクト」の近年の隆盛について、複数の関係者より詳細が述べられている。熊倉純子(監修)、菊地拓児、長津結一郎 他(編):アートプロジェクト 芸術と共創する社会、水曜社、2014
- 3) 林らにより、ケアの現場へ広がるアートに関する理論と実践について述べられている。林容子、湖山泰成:進化するアートコミュニケーション ヘルスケアの現場に介入するアーティストたち、レイライン、2006
- 4) 「ゴブリン」の意味が掲載されている。松村明(編):大辞林 第三版、三省堂、2006
- 5) 事物を直接用いて作る場合と、事物とは別の素材(粘土、テープ等)で事物の形象を表して作る場合がある。
- 6) 擬生物化表現とは擬人化表現に近いが、「人」に限らず「生物」全体のイメージで表現されることを意味する。
- 7) 図の現場別目的は、あくまで単純化したものであり、活動によっては図と異なる目的を持つこともある。
- 8) 例えば展示作品を鑑賞し、スタッフと作品についての話をするという関わり方は、このタイプであると言える

- 9) 実施団体職員自らでFAACを企画し実施する場合の段階については省略して述べた。
- 10) 準備段階からサポートスタッフが加わることもある。場合によっては一般参加者が加わることもある。
- 11) 市川により「参加型のアートプロジェクト」の歴史的成り立ちが述べられている。市川寛也:参加型のアートプロジェクトによる学びの有効性に関する考察—《放課後の学校クラブ》の実践研究を通して—、美術教育学、(36)、pp.43-56、2015
- 12) SNS(個人ブログ、Facebook)上で住民からの苦言が述べられていた(掲載年月:2016年9月、2017年9月等)。
- 13) 北川フラム:大地の芸術祭 ディレクターズ・カット、角川学芸出版、p.26、2010
- 14) 筆者は3年以上(2017年5月時点)病院小児入院病棟にて活動を継続している(図6)。長年病院組織と関わる実体験の中で、その報酬確保の難しさを実感している。
- 15) 前掲書(註13)
- 16) 岩田祐佳梨:病院共用空間における社会実験からみたアート活動の導入プロセス、筑波大学、博士論文、p.131、2017
- 17) 蓮見孝、山中敏正、貝島桃代、村上史明:「手づくね」に着目した病院の療養環境改善、日本デザイン学会研究発表大会概要集、58、p.52、2011
- 18) 香月欣浩:子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ち、四條畷学園短期大学紀要、(49)、pp.33-39、2016
- 19) ただし一般公開型の制作により、アーティストが「独立完結型」の作品を作る場合も含む。
- 20) 一般公開型で制作され、一般鑑賞者を伴う場合もある。
- 21) ただし、初期の病院での滞在制作では、一般公開型の制作を「会話見学型」にて実施していた。
- 22) 「アーティストの滞在性類型」に伴う強い協働性は、一般参加者というよりも、実施団体職員(サポートスタッフ)とアーティストとの協働作業から生じる傾向がある。
- 23) さらに依頼に対して都合が合わず実施できなかったものについても「継続の依頼」に着目し、「継続した」とした。

図版典拠

図1, 2, 3, 9, 10, 11, 16 筆者撮影

図6, 12, 13, 14, 15 協力者撮影・提供